

〈東辻保和先生追悼〉

東辻保和先生とのご縁

元高知大学人文学部国語国文学教室教授

渡邊 輝道

東辻保和というお名前を、わたしは高校一年生の時から存じ上げていた。昭和二九年（一九五四）の入学生（わたしはその一人）を迎えて、新設された京都市立紫野高校は三学年揃って一つの学舎（大半が閉校になった元私立女学校のものを引き継いだボロ校舎で新入生の期待や夢に水を差すような状態のものであった）に集うことになったのである。入学式後程なくして、新校歌の発表会があり合唱団の二部合唱で（楽団らしきものもなかった）の披露であったが、歌詞も曲も聴く者に力と希望を与えるもので新入生の不満も癒された思いであった。その作詞者が当校の国語科の教諭である東辻保和先生であることを知った。次の年、国語科の先生の研究発表会が開催されるという掲示が出て（当時でも珍しい企画であったと思うが、国語科には広島高等師範学校出身者が多くおられ、後に大学に出た方が何名もおられた）満員の会場の片隅から東辻保和先生の「二葉亭四迷」についての発表を拝聴し、拝顔もした。教室で警咳に接する機会はなかった。したがって、わたしの存在などご存じなかった。それなのに先生のお名前を耳にする時、この二つの事柄が思い浮かぶのである。

今も日本語辞書の代表として扱われる『広辞苑』（昭和三〇年初版発行）の編者、新村出博士のお宅は

紫野高校から徒歩一〇分ほどの距離にあった。どういう経緯からかは聞きそびれたが先生は新村邸に出入りして辞書に関わる仕事の手伝いをなさっていたという。新村博士も東辻先生の作詞を高く評価された。当然先生の才能、能力も見抜かれたはずである。新村邸での先生の仕事は多くの文献資料に当たる必要があるものであった。その際利用されたのが膨大な博士の蔵書や資料である。後に先生が感動の口吻で話されたのは「どの文献資料を引き出しても新村先生の書き込みや閲覧された痕跡があった。」という。新村邸で学問することの深さ、重さ、広さを学ばれたことが、数年後の先生の決断を促したと思う。因みに『広辞苑』の第二版では「あとがき」に、第三版から最新の第六版までは巻末の編纂協力者名に先生のお名前は記載されている。

昭和三九年のことであつたと思う。大阪府立高校の教諭になって京都から離れていたわたしの耳にも東辻先生が紫野高校を退職して、単身で広島大学の大学院に行かれたというニュースが伝わってきた。紫野OBにとつても驚愕の事件であつた。同窓生が集まつた時、家族（母堂、奥様、幼いお子さん二人）を京都に残して行かれたというのは先生のわがままではないかという意見もあつたが、それにしてもそれを認められた奥様は偉いということに落ち着いた。先生は修士課程を修了し、博士課程は中途退学されて、昭和四二年一〇月高知大学文理学部に着任され、後に高知にご家族も呼ばれたのである。しかし、密かに期しておられたことがあつたとわたしには思われる。

高知大学では大学教員として範とすべき方に会われた。初めて高知駅に着かれた時、「東辻保和君」と大書した紙を掲げて迎えられた国文学教室主任石津純道教授である。わたしは高知大学着任後多くの人か

ら伝説化していた石津先生の多くのエピソードを聞いたが、東辻先生からはそのご容貌に凝縮されている品格、挙措の端正さ、同僚や学生への気配り、思い遣りに関わるが多かった。それらは東辻先生自身の生活全般に反映させられていたとお見受けできた。

ご研究テーマは国語語彙史であったが、新村邸での仕事を通じて温められていたことが窺われる。中でも「もの」と「こと」ということばについての考察を終生のテーマとしておられた。語彙研究では当然の作業になるが、語彙カードの蓄積が必須になる。ある時、予告もせず官舎のお宅を訪問したことがあったが、先生はクラシック音楽（これについては造詣が深かった）をBGにしてカード作りを進めておられたので早々に失礼した。研究室ではその作業姿を見かけなかったが、自宅での作業になさっていたのである。平成九年に出版された『もの語彙こと語彙の国語史的研究』は前年に広島大学に博士論文として提出され博士を認められたものである。この御本を新村博士のご霊前に供えご報告なさったことだろう。

先生は人のためにご苦勞なさったことを話されることはなかった。大学教員になるには異端の経歴のわたしが先生から採用候補として出され任用にいたるまでには、随分ご心配、ご迷惑をお掛けしただろうことは想像に余りある。正式の着任前に官舎にご挨拶に伺った時が初対面であった。共通の話題は主に紫野高校時代のことであった。新学期冒頭国文学科の学生に挨拶しているわたしを心配そうにじっと見ておられたお顔は忘れられない。他にもわたくしごとで大変なご迷惑をお掛けしことがあったがここでは控えておく。

昭和五九年三重大学に転出された（致し方のない個人的事情を聞かされていたので、お引き留めできな

かったのが残念であった)。高知大学で一緒にできたのは五年間であったが、先生のお褒めにあずかれるようなことはできなかった。後年、わたしも定年退職し、放送大学高知学習センターに務めていた時、突然先生がおいでになり、人文学部に大学院修士課程の設置を実現させたのはお手柄であったとお褒めいただいたことは、その当時何人もの教官から恨み、憎まれざるをえなかったいやな思い出から救われた思いであった。その時が先生にお目に掛かれた最後であった。

東辻保和先生といえども眼に浮かぶのは、何冊かの本を小脇に抱えて、正面を真つ直ぐに見てすたすたと歩いて行かれるお姿である。

高知大学国語国文学会の会誌すなわち本誌の表題「高知大国文」は、東辻保和先生の御揮毫である。ただただご冥福をお祈り申し上げる。

東辻保和先生を偲んで

第二十七回（昭和五十三年度）卒業生

田中 雅和

九月二十八日、附属小学校の行事に参加していた昼休み、一時帰宅したおりに、奥様から電話をいただいた。東辻保和先生が、二七日午前八時三七分、八四歳で永眠されたとの訃報であった。あまりに突然のこ